Annual Report 2022

認定特定非営利活動法人 Living in Peace

すべての人に、チャンスを。

Living in Peace15年間の歩みと、その先の道のり

Living in Peaceは2022年11月、設立15周年を迎えました。
それぞれに仕事などの本分を持つ多くのメンバーが、真に平等な機会のある社会の実現に向けて力を合わせてきた15年間。
私たちはそのビジョンにどれだけ近づくことができたのか、
まだできていないこと、この先取り組んでいかなければならないことは何なのか――。
団体の創設者である慎泰俊と、その意志を引き継いで2018年から代表理事を務める龔軼群、中里晋三が、
Living in Peaceのこれまでとこれからについて語り合いました。

慎 泰俊（しん てじゅん）

創設者。2014 年に「五常・アンド・カンパニー」を創業。代表執行役として、インド、スリランカ、ミャンマー、カンボジアの 4 カ国でマイクロファイナンス事業を展開している。2021 年、1 児の父親に。

龔 軼群（きょう いぐん）

代表理事。2011 年に入会し、マイクロファイナンスプロジェクトの広報やファンドの管理、難民プロジェクトの立ち上げなどに携わる。本業では、企業のプロダクトマネージャー、事業責任者。書家の一面も。

中里晋三（なかざと しんぞう）

代表理事。こどもプロジェクト所属。本業は哲学研究者。2012 年から活動に参画し、こども支援部門を担当。Living in Peace の note で定期的に「代表中里コラム」を発信中。能と茶道がライフワーク。

事業規模も質も大きく変化

――創設以来掲げているビジョン「すべての人に、チャンスを。」に向かって、Living in Peace が前進してきた手応えはありますか？

慎 大きなビジョンなのでまだまだするべきことはありますが、粛々と成長して、着実に前に進んできたと感じています。事業の規模もメンバーの数もだいぶ増えた。10 数人程度だったのが、今は 160 人ほどです。正直、ここまで成長するとは予想していませんでした。

「創業時から、
社会人が本業を他に持ちながら
社会貢献をするモデルを
定着させたいと思っていました」

慎 泰俊

中里 規模に加えて、活動の質的にもどんどん成長してきたと思います。たとえば、児童養護施設の建て替え支援から始まったこどもプロジェクトは、こども食堂や里親支援など多岐にわたる事業を行うようになった。こどもたち、そしてこどもに関わる支援者の方々と、以前よりも密接に関われるようになった手応えを感じています。

龔 私も、多くのメンバーの力で、ビジョンに向かって前進できていると思います。そして、前進するために、時代に合わせて活動を変えてきたという実感があります。マイクロファイナンスプロジェクトが、ファンドの組成や管理だけでなく、気候変動により困窮する農家への支援事業にも力を入れているのはその 1 つ。また、日本に暮らす難民の方々の就職活動のサポートなど、行政や企業だけでは行き届かない支援にチャレンジできたのがうれしいです。

団体名に込めた平和への願い

慎 Living in Peace を創設したとき、ビジョンを実現するために、社会人が本業を他に持ちながら社会貢献をするモデルを定着させたいと思いました。というのは、僕は、世界を変えるには、1 人の取り組みではなく大勢の人が力を合わせ、少しずつ自分の身の回りから変えていく必要があると考えているからです。社会の風潮の変化に後押しされたのもありますが、Living in Peace は「プロボノは当たり前」というライフスタイルの変化にも貢献できたのではないかと思います。

中里 僕個人の感覚としては、「プロボノは当たり前」という想いの裏には、「日本全体の停滞や後退に対抗する足場、社会について自分なりに考えて行動する足場がほしい」という気持ちがあるのだと思います。そして、Living in Peace は、入会する人たちに対して、その足場をブレずに提供できてきた感じはしますね。

慎 格差拡大や環境問題などの社会課題に対してアクションを起こす人は増えている印象だし、希望を感じます。一方で、ウクライナ侵攻や台湾有事など、きな臭い世の中になってきていることに危機感があります。平和が脅かされているのをひしひしと感じますね。

龔 今こそ、Living in Peace という団体名そのものが大切ということですね。 団体名は、慎さんが日本国憲法の前文を参考に考えたのですよね。

慎「われらは、全世界の国民が等しく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」に由来しています。確かに、今だからこその意味がある気がしますね。平和のためにできることをたくさんしなければならない、という想いはより強まっています。

中里 平和という言葉が団体名に込められているって誇れることですよね。メンバーや活動内容が変わっても、団体名は最後まで残り続けるだろうし。僕は、物理的に平和が脅かされることに対してだけでなく、心の平和を守る活動にも力を入れたいです。社会に生きるすべての人がきちんと心の平穏を持てていれば、争いごとや暴力は防げると思うんです。

「平和という言葉を
団体名に込めたのは誇れること。
心の平和を守る活動にも
力を入れたいです」　中里晋三

活動で得られる経験を糧に

――今後は Living in Peace とどのように関わっていきたいですか？　また支援してくださっている皆様へのメッセージもお願いします。

慎 僕が考える退任した創業者のするべきことは、「見守る」と「しゃしゃり出ない」の２つ。これを徹底します。メンバーや寄付者の方が求めたら出ていきますが、それ以外のときは静かに見守ります。龔さんと中里さんの２人が代表なら大丈夫だろうって確信しているので！

龔＆中里 本当ですか？どの辺が！？

慎 Living in Peace に対する想いなどいろいろありますが、１つはきちんと継続する力ですかね。代表をお願いするときに僕が想定していたワーストシナリオが、２年ごととか頻繁に代表が変わること。トップがしょっちゅう変わる組織は危ういと思っているので、少し心配していました。でも、２人はもう４年もの間、全力で続けてくれています。「代わりのきかない人間なんていない」という僕のアイデアは確信に変わったし、Living in Peace は自分なしでもこの先前に進み続けるだろうなと思います。創業者がいなくなっても続くかというのが組織の１つの勝負どころで、そこは完全に乗り越えたと、支援者の皆様にも自信を持ってお伝えできます。

龔 ありがたい言葉と噛み締めつつ、私も後輩育成に力を入れていきたいと思います！ 代表を務めて改めて思うのは、Living in Peace には本当に多様な人が集まっていること。大学生からリタイアされた方まで年齢層も幅広いし、国籍もさまざま。このような多様な人たちがプロボノで社会課題に取り組むという組織は、日本ではまだまだユニークだと思います。こんな私たちに共感して支援くださっている方に心から感謝したいです。これからもいろいろ挑戦していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

中里 メンバーの原動力は、活動を通じて初めて出会う人たちがいるなど、Living in Peace で得られる経験の新鮮さだと思います。コロナ禍でオンラインでできる業務が増えたのを１つの学びにしつつ、メンバー同士がリアルに会う、現場に実際に足を運ぶといったオフラインのコミュニケーションにも力を入れたいですね。やはり、直接会って話すという経験からしか得られないものはあると思うので。そして、支援者の方々に出会うという経験もかけがえのないものです。「お金をいただいて報告」という事務的なものではなく、今後はもっと血の通った関係を築いていけたらうれしいです。Living in Peace が、メンバーだけでなく、支援者の方々にとっても、何か意味のある新たな経験を提供できる場に成長できたらいいなと願っています。

「『すべての人に、チャンスを。』の
実現に向けて、時代に合わせて
活動を変えてきたという
実感があります」　龔 軼群

私たちの歩み

Living in Peaceは2007年の設立以来、「すべての人に、チャンスを。」という
ビジョンの実現に向けて活動の幅を広げてきました。

2007
- 4名の有志による貧困の終焉のための勉強会を開始
- 勉強会をきっかけに Living in Peaceを結成

2009
- NPO 法人格を取得
- 日本初のマイクロファイナンスファンドを企画（ミュージックセキュリティーズと提携）
- カンボジア 第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功
- こどもプロジェクトがスタート、児童養護施設「筑波愛児園」へ訪問

2010
- 児童養護施設の建て替え支援事業とキャリアセッション事業を開始
- カンボジア 第2ファンドで約1,500万円の調達に成功

2011
- カンボジア 第3ファンドで約 3,000万円の調達に成功

2012
- 認定 NPO 法人の認定取得
- 児童養護施設「筑波愛児園」の建て替え支援を実施
- ベトナム 第1ファンドで約 2,500万円の調達に成功

2013
- カンボジア 第4ファンドで約 4,000万円の調達に成功

2014
- 「Chance Maker 奨学金事業」を開始
- ベトナム 第2ファンドで約 4,000万円の調達に成功

2015
- 児童養護施設「鳥取こども学園」建て替え支援を実施
- カンボジア 第5ファンドで約 6,000万円の調達に成功

2016
- 関西を拠点とした活動を開始

2017
- 児童養護施設「広島新生学園」建て替え支援を実施

2018
- 慎泰俊が理事長を退任。中里晋三・龔軼群が代表理事に就任
- 永和町拠点が奈良県大和高田市に完成
- 一般社団法人 MY TREE への支援が決定
- 難民プロジェクトを発足し、難民学生の就職支援を開始

2019
- ミャンマー第1ファンドで約4,000万円の調達に成功
- 「お金の教育事業」を開始
- 児童養護施設「東京育成園」と里親制度普及啓発事業の協業を開始
- 日本に暮らす難民への日本語学習の機会を提供する「LIP-Learning」を開始

2020
- ミャンマー第2ファンドで約2,500万円の調達に成功
- インドネシアの su-re.co との共同事業を開始
- 難民学生の就職支援にて国連難民高等弁務官事務所（UNHCR ）との業務提携を開始
- 東京大学と「移民・難民二世のキャリア形成に関する調査研究」を開始

2021
- 日本児童相談業務評価機関（J-Oschis）の創設に協力
- 外国籍の子育て世帯に対する緊急支援を実施

Living in Peace ALL プロジェクト　こどもプロジェクト
マイクロファイナンスプロジェクト　難民プロジェクト

Living in Peaceの社会的インパクトモデル

Living in Peaceは、3つのプロジェクトと組織横断的な活動を通じて、
機会の平等の実現に取り組んでいます。

INPUT

- プロボノメンバー
- 事業パートナー
- 寄付者の皆様からのご支援
- 出資者の皆様からの出資金
- 監事・アドバイザーの皆様からのご支援

PROJECT	ACTION	OUTPUT	OUTCOME	
ALL	社会人や学生がともに活動する	メンバーが本業の知見を活かして活躍する	活動を通じて本業とは別の知識やスキルを得る	活動を通じて得たスキルを本業やさらなる社会活動に活かす
	情報発信	SNS 等を通じて活動を発信する	より多くの人が社会課題について知る	社会課題に取り組む人が増加する
	日本に暮らす移民難民のこども支援	現金給付などの直接的な生活支援と、交流・体験の機会を提供する	支援対象者が厳しい時期を乗り切る	支援対象者が将来に向かって進むことができる
マイクロファイナンスプロジェクト	途上国の人たちの金融包摂推進	自立した生活を送るための金融アクセスを提供する	支援対象者の生活水準が向上する	支援対象者が新しい挑戦ができる
	途上国におけるソーシャルビジネス支援	途上国の社会的起業家が事業拡大に必要な非金融支援を提供する	支援対象者のビジネスが拡大する	社会課題認知を進めるとともに、対象事業に携わる人々の生計が安定する
こどもプロジェクト	困難な状況にあるこどもたちへの直接支援	こどもたちへ金銭的・非金銭的支援を行う	こどもたちが将来のために学び続ける環境を得る	こどもの将来の可能性が拡大する
	困難な家庭の課題に取り組む団体への間接支援	支援団体への金融的・非金融的支援を行う	支援団体の活動が拡大する	より多くのこどもたちが支援を得ることができる
難民プロジェクト	日本に暮らす難民の日本語習得支援	日本で生活するための日本語の基礎を習得する支援を行う	支援対象者が日本語を活かして日本社会での関係性を構築する	支援対象者が日本でより活動を拡大できるようになる
	日本に暮らす難民の就労支援	自立した生活を送るための就労機会を獲得する支援を行う	支援対象者の生活水準が向上する	支援対象者の日本の生活基盤ができる

GOAL

社会のことも、私事に。

すべての人に、チャンスを。

Living in Peaceが見据えている課題とこれまでの成果

機会の平等実現には、まだ多くの克服すべき課題があります。
Living in Peaceは3つのプロジェクトを通じてこれらの課題に取り組み、
これまでに以下のような成果を上げてきました。

	解決すべき課題	Living in Peaceの活動成果
マイクロファイナンスプロジェクト	世界で銀行口座を保有していない成人の数 約 14億人 The Global Findex Database 2021	マイクロファイナンスの認知向上フォーラム 合計動員数 1,000人以上 MF 投資ファンド数 合計調達金額 10件　3億1,731万円
こどもプロジェクト	さまざまな理由で実親と暮らせないこども 約 4万5,000人 児童養護施設入所児童等調査（平成30年度） 日本のこどもの貧困 約 7人に1人 国民生活基礎調査の概況（2019年） 年間虐待相談対応件数 20万7,659件 令和3年度児童虐待相談対応件数	施設小規模化建替え支援 1施設あたり 3,000〜5,000万円×3施設 施設退所者向け奨学金支援 1人あたり最大 288万円×16名
難民プロジェクト	2021年の日本の難民申請者数 2,413人 うち難民認定者数 74人 法務省「我が国における難民庇護の状況等」	就職活動の伴走支援を行った難民の方々 18名（うち8名が就職、8名は支援中） LIP-Learning（難民への日本語学習支援プログラム）の提供 42名

2022年の活動ハイライト ● マイクロファイナンスプロジェクト

金融包摂事業の地域・受益者拡大に向けた取り組み

活動の詳細はこちら

2022年は、支援の必要性がより高い人々の金融包摂に取り組むため、以下の活動を実施しました。

アフリカでのファンド組成

ミュージックセキュリティーズ株式会社と提携し、ケニア共和国でタクシードライバーをはじめとした低所得者層に対して融資を行う株式会社HAKKI AFRICAが資金調達を行うファンドを組成。組成条件協議、デューデリジェンスを半年以上かけて実施したほか、コロナ禍ながらもケニアにも渡航の上で調査を行いました。約6か月間の募集期間を経て1,485万円を調達し、2023年1月以降、タクシードライバー向け車両購入資金を含む同社のファイナンス事業の運用資金に充てられます。

国外難民向け金融包摂事業の調査検討

難民をはじめとした強制移動者の数は年々増え続けていますが、緊急支援だけでなく、こうした方々が避難先で自立した生活を営み、特定の受入国に偏りがちな負担を軽減できるよう、金融支援を届ける方法を調査しています。言語や受入国の難民政策、産業、社会的・文化的類似性・許容性といった要件がある中、強制移動者に対しても門戸を開くマイクロファイナンス機関と提携し、低コストの資金調達を実現する方法を検討していきます。

ケニアのファンドではタクシードライバー向け車両購入資金を調達

支援するマイクロファイナンス機関からの声

HAKKI AFRICA
CEO **小林嶺司** 氏

Living in Peaceと最初に連絡を取り合ったのは、我々の無担保マイクロファイナンスを中古車担保ローンにピボットした直後でした。まだ明確な実績もない中でどのように協力し合えるか協議を始め、今Living in Peaceの支援によってファンドレイズが完了したことを感慨深く思います。

我々のエンドユーザーの資金調達条件とほぼ相違のない調達ができたことは、我々にとってのみならず、顧客にとっても大きな社会的インパクトとなります。

同じ志を持って、未来を変えていく仲間がいることが非常に嬉しく、感謝しています。

メンバーの想い

金融包摂は、典型的な開発や人道支援とは異なり、支援が即ち受益者の利益に還元されるものではなく、受益者のリテラシーなど一定の前提条件の充足が必要となりますが、日本に生きる私たちが当たり前にアクセスできている金融サービスを提供する非常に重要な役割を担っています。Living in Peaceのファンドは、金融包摂に取り組むという明確なミッションを掲げ、さまざまな専門性を持つ民間セクターのプロボノメンバーが結集して組成に携わり、日本の投資家から資金調達するという非常に有意義かつユニークなものです。最初のファンドから10年以上が経過した現在もその価値は損なわれていないと感じます。受益者、マイクロファイナンス機関、メンバー、投資家が邂逅する、いわばプラットフォームとしての価値を衰えさせず、これからも弛みなく取り組んでいきたいと思います。
（マイクロファイナンスプロジェクト・首藤聡）

2022年の活動ハイライト ● マイクロファイナンスプロジェクト

金融包摂・マイクロファイナンスに関する情報発信

活動の詳細はこちら

金融包摂分野で活躍する社会起業家を招いたイベントを開催

「世界のファイナンシャルインクルージョン－日本の社会起業家たちの挑戦－」と題するイベントを対面＋オンラインのハイブリット形式で開催。金融包摂における課題やマイクロファイナンスの現状を議論しました。

ミャンマーのマイクロファイナンス機関への支援に関するオンライン報告会を開催

Living in Peace が支援するミャンマーのマイクロファイナンス機関 MJI エンタープライズとともに、同支援によって組成したファンドの運営状況と、クーデター後の現地の顧客や営業の状況を共有。コロナ禍の中実施していた MJI の取り組みや今後の展望、新たに開始したコーヒー農家へのマイクロファイナンスの提供についても紹介しました。MJI の活動については、出資者に送付しているマンスリーレポートでも、融資を受けた顧客や MJI のスタッフへのインタビューを通じ、融資後の顧客の生活やミャンマーの状況についてお伝えしています。

支援するマイクロファイナンス機関からの声

MJIエンタープライズ
CEO **加藤侑子** 氏

ミャンマーでは他国で起きているニュースが流れている後ろで、人知れず命が奪われ貧困が再び人々の生活を覆っています。努力の甲斐なく大きな政治、経済の波に飲まれていくお客様はもちろん、そんな人々に日々向き合う現地スタッフの心の痛みは計り知れません。

Living in Peace の皆様とファンドを立ち上げた当時とは全く異なる世界になってしまいましたが、立ち上げ当初と変わらぬ心で、今もレポートやファンドの運営を支えていただいています。また、苦境の中で現地のお客様が大切に守り育てたコーヒーを届けるプロジェクトでは、広報面での支援もいただきました。困難な時代でも、手をとり同じ未来を目指す仲間がいるから前に進めていることに、日々ミャンマーからみんなで感謝をしています。

メンバーの想い

ファンドの事業者と投資してくださった投資家とのコミュニケーションのサポートやモニタリングを通じ、双方がファンドを組成・投資して良かったと思っていただけることを目指しています。

現在ファンドを運用中の MJI があるミャンマーも、これから本格的にモニタリングを開始する HAKKI AFRICA のあるケニアも、日本ではあまりニュースとして報道されていない国です。そのため、そうした国の情勢の変化をいかに早くキャッチアップし、投資家の皆様にどのようにお伝えするかが課題だと感じています。

今後も事業者とコミュニケションを取りつつ、投資家の皆様へタイムリーに現地の状況をお伝えしてまいります。

（マイクロファイナンスプロジェクト・原 好乃）

2022年の活動ハイライト ● マイクロファイナンスプロジェクト

途上国ソーシャルビジネス支援

活動の詳細はこちら

営業活動支援のためのインフラ・ツールを構築

インドネシア・バリ島で「気候変動に起因する農家の貧困」に取り組んでいるパートナー、su-re.co（シュアコ）の日本における営業活動を引き続き支援。EC サイトや note など営業活動の基盤となるインフラ・ツールの構築を完了し、日本国内のホテルやエシカル商品取り扱いショップなどへの広報活動を通じてコーヒー豆約 200kg の販売を実現しました。これにより現地の生産農家にバイオガスキット 1 台分を提供できる利益を上げたほか、農家の方々を対象とした気候変動スクールも実施しました。

su-re.co の活動に関するメンバー向け勉強会を開催

気候変動の実態、販売を支援する農作物（コーヒー等）、su-re.co の活動内容などに関する有志勉強会を月 1 回開催し、活動に対する理解を深めています。

su-re.co のコーヒー豆の売上の一部は、生産農家へのバイオガスキットと気候変動に関する教育プログラムの提供に充てられる

支援するソーシャルビジネス事業者からの声

Living in Peace は私たちが支援する農家のストーリーを的確に伝えることで、su-re.co を日本のビジネスパートナーとつなげ、インドネシアの農家の生活向上に貢献してくださっています。貧困をなくすという共通のゴールに向けてともに歩んでくれることに感謝しています。

su-re.coスタッフ
Sarah Wibisono 氏

Living in Peace の支援は商品の販路拡大だけでなく、su-re.co の活動の意義に対する認知向上にもつながっています。インドネシアの農家がより大きな市場にビジネスを展開できるよう、多大な協力をいただいていることを心からありがたく思っています。

su-re.coスタッフ
Oktavianna Winda 氏

メンバーの想い

気候変動を要因とする貧困という、日本でまだ十分に知られていない社会課題に対する認知を向上するとともに、日本での商品販売を通じて現地農家の生活支援に貢献することを目指しています。メンバー全員がプロボノのため平日の日中に動きづらいことが営業活動支援の課題ですが、さまざまなツールの活用などを模索しながら新規の販売先開拓にチャレンジしていきたいと思っています。
（マイクロファイナンスプロジェクト・髙橋憲一）

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

永和町プロジェクト

活動の詳細はこちら

（左）フードパントリー
（右）プログラミング教室

こども食堂を再開

コロナ禍以降中止となっていた、奈良県大和高田市の「永和町ベース」におけるこども食堂「りっぷキッチン永和町」を再開。約1年かけて感染対策に留意した開催方法を模索してきた取り組みが実り、2022年6月から毎月第3土曜日に開催し、11月までの6か月間でのべ128名のこどもたち・地域の方々が参加しました。

フードパントリーを継続

コロナ禍で開始したフードパントリーも引き続き実施。永和町ベースにて2021年10月～2022年9月の間に9回開催し、のべ920名のこどもたちにお米、レトルト食品などの食材やお菓子を配布したほか、大和高田市内の6か所のこども食堂と合同で開催した食支援イベント「つながるチカラ大作戦」第2弾、第3弾として1,963名のこどもたち（933世帯）を支援しました。

プログラミング教室 LIPLAB（リップラボ）を開始

学生団体「ハートレスQ」と連携し、永和町ベースにて毎週日曜日に小学生を対象とした無料のプログラミング教室を開催。2022年12月までにのべ125名のこどもたちが参加し、プログラミング能力だけでなく、自分独自の表現力や、何かができるようになっていく自信を身に着けていっています。

利用者・参加者の声

- こんなに支援の品をいただけて親子ともども助かっています。長期入院になり、こどものことも親のことも心配、でもこうして地域の方に助けられ、本当に有難く感謝の気持ちでいっぱいです。（フードパントリー参加者）
- コロナで夫が仕事を失って実家に戻っています。たくさんの食材は助かります。（フードパントリー参加者）
- コロナ禍での出産でなかなか周りとの交流もなく過ごしてきたので、ボランティアは親子ともにとても有意義な時間でした。（フードパントリー参加者、現地ボランティア）
- 社会の中で滞っている物資や人とのつながりがりっぷキッチンを通して動きだし、小さな循環が生まれていることを感じました。（現地ボランティア）
- とても楽しく感じているようで、毎週心待ちにしています。これからも続けて通いたいです。（プログラミング教室参加者の親）
- 最初はどんなことをやるのかわからなくて緊張したし、操作も難しかったけど、ゲームが完成したら楽しかった。（プログラミング教室参加者　小学生）

メンバーの想い

こども食堂と関わりを続ける中で、自分が住むまちにも相対的貧困と言う社会課題が存在することに気づきました。埋もれてしまいがちなこの問題を、同じまちに住む人間として見過ごしてはならないと感じ、活動を続けています。

コロナ禍によって、以前のように対面で食事をしながら楽しく会話したり、何時間でも滞在して好きなことをしたりできる「居心地の良い居場所」を作ることが難しくなっています。それでも、地域のこどもたちを包括的に見守り、セーフティネットとしての機能を果たせるような場づくりを、チーム一丸となって目指していきたいと思います。（こどもプロジェクト・萱澤有淳）

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

キャリアセッション

活動の詳細はこちら

「おしごとリップ」を継続実施

児童養護施設で暮らすこどもたちを対象に、将来の職業の選択肢を広げるとともに非認知能力*の向上を目指すキャリア教育プログラム「おしごとリップ」を提供。オンラインと対面で月1回、NPO／NGO、流通、農林水産、IT、小売などの業界について講義とワークショップを組み合わせたプログラムを実施し、21名のこどもたちが参加しました。

関西での実施を開始、他団体にもプログラムを展開

これまで「おしごとリップ」を実施してきた関東地方の2施設に加え、2022年4月より関西でのプログラム提供も開始しました。また、より多くのこどもたちにキャリアセッションを体験してもらえるよう、活動の趣旨に賛同する4つの団体にノウハウを共有し、プログラムの横展開に取り組んでいます。

非認知能力向上施策の検討を推進

こどもたちに必要な非認知能力の定義をあらためて整理し、その向上のための施策を検討。今後「おしごとリップ」への導入を進め、職業紹介にとどまらない非認知能力を向上するプログラムとして強化していきます。

オンラインと対面で開催した「おしごとリップ」

＊粘り強さ、やり抜く力、ストレスへの弾力性（レジリエンス）等、「性格の強み」とも呼ばれる能力

「おしごとリップ」参加者の声

- 今までにない自分の成長を感じることができたし、色々な人と交流し、たくさんのことを考えられたと思います。参加してみて本当に良かったです。（高校生）
- 自分の考えなどをわかりやすいように伝えたり。自分から手を挙げて発表したりしたことが一番思い出に残りました。（高校生）
- 自分のためになる講義をしてくれて、すごく身に沁みました。社会で失敗しないように、人生を大切にしていきたいです。（高校生）
- やりたい仕事や自分の目的を見つけられるようにしようと思うきっかけになりました。（中学生）

メンバーの想い

自分たちが中高生の頃に得たかった体験をコンテンツ化しようと、熱い議論を交わしながらプログラムのブラッシュアップを重ねています。今後は運営側の業務負担の軽減に向けた仕組みづくりにも尽力していきます。（こどもプロジェクト・村瀬彩萌）

今年度実現できたプログラムの横展開を通じ、これまで私たちが蓄積してきた知見を共有して、より多くのこどもたちに受益者となってもらいたいと思っています。他団体でも継続的に実施していただけるようサポートしていきます。（こどもプロジェクト・徳永香織）

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

建て替え支援

活動の詳細はこちら

建て替え後の施設（左から筑波愛児園、鳥取こども学園希望館、広島新生学園）

3 施設の建て替えに対する資金調達を完了

児童福祉施設をより家庭的な小規模施設に建て替えるための費用として、2015 年から筑波愛児園と鳥取こども学園希望館、2019 年から広島新生学園に寄付を実施し、当初は筑波愛児園は 2027 年、鳥取こども学園は 2029 年、広島新生学園は 2036 年までの期間で一定額の寄付金を支払う予定でした。しかしながら多くの寄付者に支えられ、必要な資金調達が早期に完了したため、3 施設ともに残額を当期に支払い、必要な資金支援が完了しました。

2022年7月期の寄付金額とこれまでの寄付総額

筑波愛児園

21,153,847円（総額 50,000,002円）

鳥取こども学園

19,250,000円（総額 40,000,000円）

広島新生学園

33,002,000円（総額 41,000,00円）

建て替えを支援した施設からの声

- 私が小学校 3 年生の時､初めて希望館に来た時の感想は､「こわかった」です。建物が薄暗かったからです。小学生ならきっと誰でもこわいと感じると思います。戸も勝手に開くし､今思えば､見た目も寮や施設っぽかったです。今は､きれいで明るいし､1 人部屋で､リビングやキッチンも別々になっていて､トイレも 2 つあるし､お風呂も足が伸ばせるし､とても快適です。今なら､昔の私のような小さい子が入ってきても､マンションみたいで素敵だなと思ってくれると思います。ありがとうございました。今はまだ無理だけど､私も大きくなったら､困っている人に寄付できるような人になれたらなぁと思います。（鳥取こども学園希望館に暮らすこども）
- とてもきれいで過ごしやすく、帰ってきて「ただいま」って言葉が無意識に出てくるくらい、安心感があります。どこをとっても､「自分の家だ」と思えて､とても気に入っています。 本当に感謝しかありません！（鳥取こども学園希望館に暮らすこども）
- 以前の建物の時には考えられませんが、こどもたちはそれぞれが個室を持ち、プライバシーが守られた安心・安全な環境のもとで伸び伸びと過ごして います。こんな生活が保障されたのも皆様方の多くの愛、支えがあってこそだと感謝の念に堪えません。今後とも希望館を見守っていただけたらと願います。本当にありがとうございました。（鳥取こども学園希望館職員）
- こどもたちと一緒に古い建物から新しい建物への引っ越しをしたのが、ついこの前のように感じます。以前の建物の構造では、食事の準備をする時にはこどもたちに背を向けなければいけませんでした。それが新しい建物に変わって対面キッチンへになり、こどもの姿を見ながら準備ができるようになった時の嬉しさを今でも覚えています。食事の準備をしながら学校の様子を聞いたり、ふざけて笑い合ったりと、新しい建物になったおかげでこどもたちと自然と楽しくやりとりする機会が増えたように感じます。（鳥取こども学園希望館職員）

メンバーの想い

こどもたちが身の回りの人たちから愛されているという感覚を持つためにも、一般的な家庭環境に近い環境で生活することはとても重要です。施設の建て替えは多額の資金を要しますが、皆様のおかげで 3 施設への資金調達を完了することができました。全国的に小舎化はかなり進んできたものの、児童福祉･社会的養護においては他にもまだ多くの課題があります。必要な支援ニーズを見極めながら、引き続き課題解決に取り組んでいきます。（こどもプロジェクト・信崎謙太）

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

奨学金

活動の詳細はこちら

児童養護施設退所者への奨学金給付と伴走支援を継続

9名の奨学生（在学中6名、休学中1名、卒業1名、中退1名）に家賃補助として月額上限60,000円（実費）、オンライン授業参加のための通信費補助として月額5,000円の奨学金給付を継続（休学・卒業・中退者はその時点まで）。半年ごとに資金シュミレーションを行い、面談を実施して学生の状況と卒業に影響する課題がないかを確認しています。休学中の学生とも面談を行い、来年度の復学に向けてフォローを実施しています。

メンバーの想い

周りに頼れる大人が少ない奨学生にとって気軽に関われる大人の一人になれるよう、奨学金だけでなく私たちが持っている知識や経験も共有していくよう心がけています。近年では給付型奨学金の選択肢が増え、私たちの奨学金も一定程度の役割を終えたため、新規の奨学生募集は停止していますが、受給中の学生には卒業までしっかり伴走していきます。（こどもプロジェクト・小笠原健太）

奨学生の声

2022年3月に無事に保育の短期大学を卒業しました。2年間の学生生活はコロナ禍の真っ最中だったので、対面授業や演習はほぼできずに終わってしまいましたが、全5回分の実習には参加でき、制限された学生生活の中でも現場で学べることが多くありました。そして、成績優良者で短期大学を卒業することができ、4月からは公立保育園で1歳児の担任をしています。保育士1年目として毎日が不安なことだらけではありますが、先輩方に色々と教わりながら乗り越えたいと思います。

皆様のおかげで充実した学生生活を送ることができ、公務員という夢を叶えることができました。皆様に支えていただいた2年間を忘れることなく、これからの社会人生活を頑張りたいと思います。ありがとうございました。

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

里親支援

活動の詳細はこちら

世田谷区における里親制度の普及啓発をサポート

世田谷区の児童養護施設・東京育成園が運営する里親啓発サイト SETA-OYA の広報やコンテンツ制作を引き続き支援。オンライン広告やSNS活用をサポートしたほか、里親向けアンケートの実施やオンラインイベントの共催なども通じ、里親制度の普及啓発に寄与しました。

メンバーの想い

こどもには「自分だけを見てくれる大人」の存在がとても大事。だからこそ、里親制度が社会の中で一般的なものになってほしいと思います。私たちだけでできることは限られているので、こどもと関わっている施設の方々、里親に興味を持ってくださる地域の方々、行政などと幅広く協力し合いながら認知を広げていきたいです。（こどもプロジェクト・角田真理）

2022年11月に開催したオンラインイベントでは東京育成園、里親家庭向け訪問型支援を行うNPO法人バディチームとともに里親制度の現状と課題、今後のアクションについて議論

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

実親子支援

活動の詳細はこちら

母子生活支援施設の退所世帯にギフトを贈呈

東京都内にある4つの母子生活支援施設と協力し、施設を退所した73世帯へクリスマスギフトを贈呈。困難を抱えやすい退所世帯が施設とつながり直すきっかけを提供することができました。

母子生活支援施設の紹介パンフレット制作に協力

東京都社会福祉協議会母子福祉部会が発行する、母子生活支援施設を紹介するパンフレットの制作に協力。パンフレットは330か所以上の関係機関で配布されています。

親の回復支援を行うMY TREEをサポート

こどもへの虐待や暴力に至ってしまった親の回復支援プログラムを提供する一般社団法人MY TREEが自立して安定した活動ができるよう、広報面を中心に支援。採用やクラウドファンディングを自走できるノウハウが構築できてきました。

左：母子生活支援施設の退所者向けギフト案内
右：東京都社会福祉協議会母子福祉部会のパンフレット

支援対象者の声

- 母子施設から連絡があり、つながりを実感して心強かった。（ギフトを受け取った方）
- よく食べる子どもたちにたくさんおにぎりが作れると思って、お米を選びました。留守番させることが多いので食べ物が家にあると思えれば、親の私の気も楽になるのです。親切な取り組みをありがとうございます。（ギフトを受け取った方）
- 電話が苦手で応答してくれなかった退所者の方が、ギフトの手紙が届いたことで電話をくれ、子育てに困っていることを教えてくれたため、助言をすることができました。（母子生活支援施設の職員）
- 各自治体等に配布後は大きな反響があり、関心を持っていただけたようです。区役所にパンフレットを持って問い合わせに来た方もいらっしゃったそうです。（東京都社会福祉協議会母子福祉部会）
- プログラムの実践活動と並行して寄付の募集や採用に取り組む中で、Living in Peace から知見の提供や、アドバイス、サポートがとても役立っています。（一般社団法人 MY TREE）

メンバーの想い

複合的な困難を抱える家庭に対して回復支援プログラムなど適切な支援につながる機会を提供することで、社会的養護の内外を問わず、すべてのこどもたちに実親のもとでの適切で十分な養育環境を提供することを目指しています。母子生活支援施設との活動を通じて継続的なニーズが明らかになったアフターケアの課題に取り組むほか、社会資源にアクセスしにくい若年の妊婦や在留外国人などにも支援の幅を広げていきたいと思います。（こどもプロジェクト・青山摩美）

2022年の活動ハイライト ● こどもプロジェクト

お金の教育

活動の詳細はこちら

「進学シミュレーション」の展開を開始

社会的養護下のこどもたちが専門学校や大学に進学するにあたって資金計画を立てるためのシミュレーションサービス「進学シミュレーション」を開発し、2022年3月にリリース。5月には児童養護施設の自立支援コーディネーターの方々を対象にオンライン説明会を開催し、機能を紹介しました。同サービスの月間ユニークユーザーはリリースから約半年で100人を超えています。

「お金の教育講座」を開催

児童養護施設で暮らす中高生を対象にお金に関するリテラシーを育む「お金の教育講座」を引き続き開催し、20名のこどもたちが受講しました。講義とワークショップを通じて、お金にまつわるライフプランの設計や家計簿アプリの使い方、投資詐欺の問題など、社会に出てから必要になるお金の知識を身に着けてもらいました。

「進学シミュレーション」の画面と説明会の様子

支援対象者の声

- 「大学、専門学校にいきたい」という夢を持つこどもたちでも、授業料などについて自分で調べる姿はなかなか見られません。そうした子たちに「進学シミュレーション」を教えてあげたいし、それをもとに職員たちと一緒に調べていけるとよいなと思いました。(「進学シミュレーション」の説明会に参加いただいた自立支援コーディネーターの方)
- 普段学べないことが学べ、借金や悪い話の怖さを知れてよかった。(「お金の教育講座」を受講した中学3年生)
- 4月から18歳が成人年齢になることを知らなかった。これから一人暮らしする上でお金に向き合わないといけないので勉強になった。(「お金の教育講座」を受講した高校3年生)

メンバーの想い

施設出身のこどもたちは、一般家庭のこどもたちよりもお金に関わる機会が少なく、そのことが社会に出て生活する上での足枷になっています。そのデメリットを埋めていけるようシミュレーションや講座を提供していくとともに、構築したリソースをより多くの施設に展開していきたいです。(こどもプロジェクト・波多野裕理)

2022年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

LIP-Learning

活動の詳細はこちら

日本に暮らす難民 23 名の日本語学習を支援

日本に暮らす難民の方々の経済的自立、社会統合を目指し、日本語学校との提携により、各受講者がレベルに合わせた授業を受講できるよう支援。受講者ごとに担当者が伴走し、修了まで継続的にサポートしています。2021 年度までに 42 名の日本語学習を支援し、2021 年度受講者のうち 1 名が日本語能力試験の N2（中上級）に、2 名が N3（中級）に合格しました。2023 年 11 月には 23 名がプログラムを修了する予定です。

就労支援チームとの連携で 2 名の受講者の就職を実現

受講者を就労支援（P19 参照）へとつなげ、2 名が国内の企業から内定を獲得しました。

クラウドファンディングを実施

2022 年 5 ～ 6 月に受講費の支援を募るクラウドファンディングを実施し、349 名の方々から 551 万円の寄付をいただきました。

修了時には日本語で母国を紹介するプレゼンテーションを実施

受講者の学習ノート

LIP-Learning受講者の声

■応援していただき、本当にありがとうございます。日本語能力試験 N1 に合格するまで、引き続き応援をよろしくお願いします。できれば週に 3 回、日本語の授業を受けたいと思っています。また、日本語の文章を読むスピードも上げたいと思います。

■以前は、わからないことがあっても「かしこまりました」と言っていました。今は、相手が話していることがよくわかるようになりました。以前は、病院に行くときは必ず誰かに一緒に行ってもらい、通訳してもらっていました。今は、いつも一人で行っています。

メンバーの想い

活動に参加したきっかけは、自分自身が海外で生活した経験から、言葉の壁が大きな問題になることに気づかされたことです。まして、やむなく日本に逃れてきた難民の方々は、言語の習得に生活がかかっているため、課題としてはより深刻。能力があっても日本語が壁となって仕事を得られない現実を少しでも改善したいと思っています。まだ受講を希望する人の半分も支援できていないので、限られた資金で多くの受講者を受け入れられる方法を模索しているところです。（難民プロジェクト・坪井一呂志）

2022年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

就労支援

活動の詳細はこちら

難民の大学生の就職活動を伴走支援

日本に暮らす難民の大学生を対象に、日本での就活に関する情報提供を行うほか、自己分析、履歴書の添削、面接の練習などをサポートし、それぞれの個性に合わせて希望の仕事に就けるよう支援。2018年から累計18名の学生を支援し、うち8名が国内の企業への就職を実現しました。現在は8名のサポートを継続しており、すでに大学4年生・3年生各1名ずつが内定を得ています。

国連難民高等弁務官事務所駐日事務所（UNHCR）、国際協力機構（JICA）と連携

UNHCR難民高等教育プログラム（RHEP）の奨学生向けに「はたらくことについて考える」をテーマとしたキャリア・就活支援セミナーを開催。JICAシリア平和への架け橋・人材育成プログラム（JISR）の研修生向けにも同様にセミナー開催を企画しているほか、民間企業と連携した就活の伴走支援も行っています。

RHEPの奨学生向けに開催したキャリア・就活支援セミナー

支援を受けて内定を獲得した学生の声

Living in Peaceの方々に相談に乗ってもらう前は、就活の右も左もわからない状態で、不安でいっぱいでした。たくさん時間を割いて相談に乗ってくださり、模擬面接やエントリーシートの添削など丁寧に対応していただきました。不安だった気持ちが解消され、自信を持って就活をすることができました。また面談の時間以外にもLINEで疑問に思ったことを質問すると、どうするべきか教えてくださり、検索してもわからないことなど、皆さんのサポートがなかったらどうなっていたんだろうと、本当に感謝しかありません。また就活だけでなく、キャリアプランについてもアドバイスくださり、受かるためだけのテクニックというわけではなく、自分の人生を考えた上で仕事を選ぶということもサポートしていただけました。（大学4年生、エンタメ系の企業に内定）

メンバーの想い

相談に来る学生は自分のルーツから就活に不安を抱えていることが多くあります。学生が私たちのサポートを通じて自身の強みを発見し、自ら就活を突破しているのを見ると、やりがいを感じます。難民の方々は新卒だけでなく中途採用でも多くの課題に直面するので、今後はそうした方々への支援体制を整えていきたいです。（難民プロジェクト・里見春佳）

2022年の活動ハイライト ● 難民プロジェクト

研究活動

活動の詳細はこちら

東京大学との共同研究の調査報告を発表

東京大学と実施している移民・難民二世のキャリア形成に関する共同研究において、調査報告書と Living in Peace としてのソーシャルアクションを発表。あわせてオンライン調査報告会を実施し、UNHCR や JICA、移民・難民支援団体、アカデミアや企業、学生など 60 名近くの方々にご参加いただきました。

組織の文化的多様性を評価する指標づくりを開始

企業が文化的多様性の向上に向けてノウハウを共有できる仕組みを構築していくための、評価指標の策定に着手。一般社団法人 Welcome Japan、パーソルホールディングス株式会社などと協働で、バージョン 1 の策定を進めています。

調査の結果に基づき Living in Peace として取り組むべきソーシャルアクションを策定

調査報告会参加者の声

- 自分のルーツを話す時、涙を流す方もいる。1 人 1 人の意識が変わり、社会が動いたらいいなと強く思いました。
- 予想はしていましたが、日本の企業の多様性に関する取り組みがまだまだ足りていないと感じました。その中でも一部の会社では各部署で必要とされる多様な人材を採用することがあると知り、そのような動きが広がればよいと思います。
- 企業の文化的な多様性を測る指標の策定に大いに期待しています。最初は形から入るとしても、普及の過程できっと意識・風土に変化を起こせると思います。

メンバーの想い

研究活動は移民・難民の方々への直接支援ではなく、仕組みを作り、社会にインパクトを与えることで、最終的に移民・難民の方々がより働きやすい環境を創出することを目指しています。私たちだけでは達成できないこの大きなゴールに向けて、もっと多くの組織や企業を巻き込んで前進したいと思います。
(難民プロジェクト・朱震)

移民・難民のこども、外国にルーツを持つこども支援

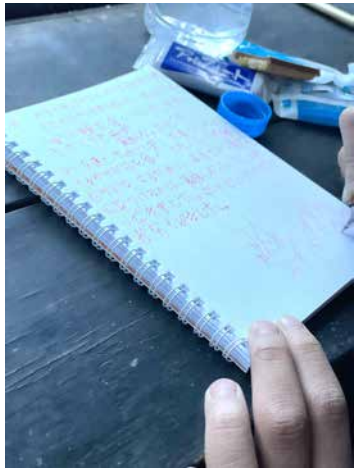
「移民・難民の子どものいのちを守る基金」支援報告書を公開

2021年2月から8月にかけて全3回実施した、コロナ禍でセーフティーネットからこぼれる移民・難民の子育て世帯への緊急支援についての報告書を公開しました。のべ128世帯、224名のこどもたちに5,650,000円相当の支援を提供した成果報告に加え、支援を受けた方々からヒアリングしたさまざまな生活ニーズをまとめています。

新規事業に向けたヒアリングとトライアル

外国にルーツを持つこどもたちと支援団体にヒアリングを行った上、洗い出した課題をもとに事業スキームを構築。日本語学習の機会や地域社会とのつながりが持ちづらい状況にある外国ルーツのこどもたちに、「自分の将来を考えるきっかけ」を提供するためのトライアル事業「おでかけリップ」を計画しています。

全4回のプログラムのうち、第1回を2022年12月に実施。外国ルーツの親子が集い、自然の中でさまざまな体験をしながら仲間づくりをしました。今後もワークショップやおしごと体験などの活動を予定しています。



第1回のプログラムには7名の子どもたちとその親御さんが参加し、自然の中で薪割りや火起こしなどを体験。活動後には感想文を書いて振り返りを実施

メンバーの想い

この事業を通じて目指すのは、外国にルーツを持つこどもたちが、生まれや国籍・人種等に左右されず、自分らしく生きられるような後押し・機会提供を行うことです。日本に住む在留外国人は年々増加しており、家族の呼び寄せで来日するこどもや日本で生まれているこどもも増えていますが、彼らが抱えるさまざまな困難はこれまで見過ごされてきました。その困難に微力でも寄り添い、支える手段となるような継続的な支援の形を模索しています。

（外国ルーツのこども支援チーム・宮成静）

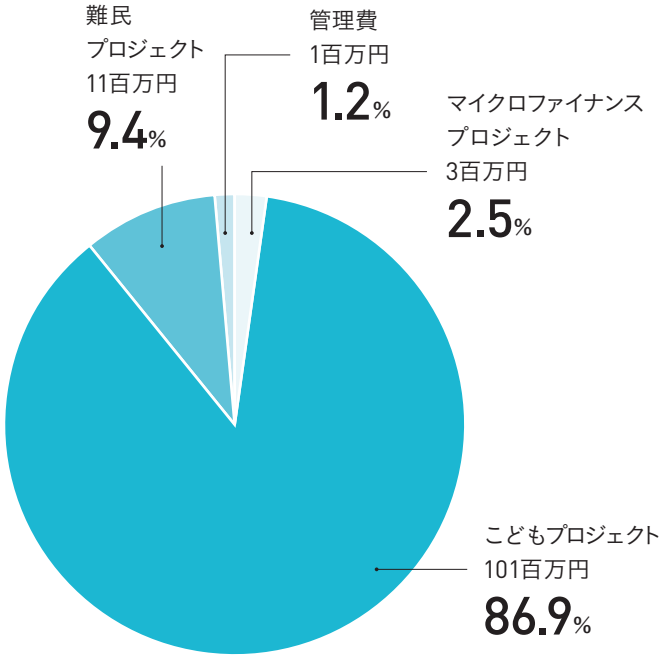
会計報告

活動計算書

（単位：円）

科目	2021年7月期 ①	2022年7月期 ②	前年同期比②－①
Ⅰ 経常収益			
1. 受取会費	938,500	1,023,500	85,000
2. 受取寄附金	58,840,983	101,892,898	43,051,915
3. 受取助成金等	0	0	0
4. 事業収益	553,168	630,746	77,578
5. その他収益	29,066	1,047	▲ 28,019
経常収益計	**60,361,717**	**103,548,191**	**43,186,474**
Ⅱ 経常費用			0
1. 事業費			0
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	43,148,899	115,347,335	72,198,436
事業費計	43,148,899	115,347,335	72,198,436
2. 管理費			0
（1）人件費	0	0	0
（2）その他経費	710,448	1,366,189	655,741
管理費計	710,448	1,366,189	655,741
経常費用計	**43,859,347**	**116,713,524**	**72,854,177**
税引前当期正味財産増減額	16,502,370	▲ 13,165,333	▲ 29,667,703
Ⅲ 法人税等	70,000	70,000	0
当期一般正味財産増加額	16,432,370	▲ 13,235,333	▲ 29,667,703
前期繰越正味財産額	56,279,226	72,711,596	16,432,370
次期繰越一般正味財産額	**72,711,596**	**59,546,263**	**▲ 13,165,333**
受取寄付金	11,068,553	0	▲ 11,068,553
一般正味財産への振替額	▲15,032,241	▲64,747,041	▲ 49,714,800
前期繰越指定正味財産額	68,710,729	64,747,041	▲ 3,963,688
次期繰越指定正味財産額	**64,747,041**	**0**	▲ 64,747,041

経常費用の内訳



費用のうち、98.8%が事業運営のために使用されています（管理費1.2%は団体維持のための費用です）。

2021年度は、主に指定正味財産からの振り替えにより、経常収益は43百万円増の104百万円となりました。

経常費用はコロナ禍の影響緩和による一部活動の再開、こどもプロジェクトでの建替における一括償還、マイクロファイナンスプロジェクトでの新規ファンド組成、難民プロジェクトでのLIP-Learninng受講者増加等で、活動費が大幅増となり、全体では前年比73百万円増の117百万円となりました。

なお、Living in Peaceは、メンバー全員が他に本業を持ちながらパートタイムで活動しているため、人件費は発生していません。

Living in Peaceを支えてくださっている皆様

監事・アドバイザーとしてLiving in Peaceを支えてくださっている皆様より、
メッセージをいただきました。

監事
五十嵐裕美子
五十嵐綜合法律事務所弁護士

本業と両立しながら、これまでの人生で培った個々の経験や能力、そして人生観や理念を活かし、社会課題解決に取り組まれる姿に、私自身も大いに刺激を受けています。仲間の知識・経験やバックグラウンドへの敬意と想いを実現する情熱を持つ、多様で魅力的な皆さんが、今後もLiving in Peaceの内外で、「すべての人に、チャンスを」届けられる公正な社会を築くためにどんな創意工夫に満ちた活躍をされていくのか、楽しみで目が離せません。

監事
鈴木 瞳
元 マカイラ株式会社 執行役員

15周年を迎え、ますますの事業や組織の成長があったこと、関わってこられた全ての方々の努力の賜物だと思います。プロボノで社会貢献に関わる働き方は、今でこそそれほど珍しくはなくなりましたが、Living in Peaceのメンバーほどの緻密さと覚悟でそれを継続している人は多くはありません。「機会の平等を通じた貧困削減」という大きな目標の達成のために、この先もみんなでそのバトンを継いでいきましょう。

アドバイザー
小森哲郎
株式会社ファイントゥデイ
代表取締役社長兼 CEO

高いアスピレーションを持つ、さまざまなバックグラウンドの仲間たちが、日々本業の仕事をこなしながら、世界のDiversity & Inclusionの課題にチャレンジする、それがLiving in Peaceです。世の中へのポジティブ・インパクトの提供と彼ら個人の成長を両立できるチャレンジの機会を後押しできることは、何よりの楽しみであり、また喜びです。

アドバイザー
河口真理子
立教大学
21世紀社会デザイン研究科
特任教授

まだプロボノという言葉がほとんど知られていない時代にスタートしてから15年、世間がLiving in Peaceの掲げた目標に追いついてきましたね。働き方改革がいわれ、人材が人的資本として脚光を浴びる中、リスキリングや越境学習なども注目を集め、プロボノはその有効な手段と評価されるようになりました。Living in Peaceの「人の笑顔が報酬」という仕事、それに共感し集う人たちの志の和と輪。次の15年に向けて一段と広がりますように！

企業からの支援

Living in Peaceの活動は、企業の皆様からのご支援にも支えられています。
ご支援いただいている企業よりメッセージをいただきました。

コストコホールセールジャパン株式会社

コストコは「従業員が住み、働いている地域・近隣社会に貢献する」という指針のもと、特に将来を担うこどもたちに対しての支援を行っています。Living in Peace の「すべての子どもに、チャンスを。」というビジョンに共感し、支援を始めました。次世代を担うこどもたちが生まれや育ちのために夢を持つことを諦めることなく、一歩一歩明るい未来に向かって歩んで行けるように弊社としてできるサポートを継続していきたいと思います。

株式会社ファイントゥデイ

株式会社ファイントゥデイは「世界中の誰もが、素晴らしい一日を紡ぎ、いつまでも美しく、豊かな人生を送れるようにすること」というパーパスのもと、社会とともにサステナブルな発展を遂げていくことを目指しています。このたび、次世代支援のアクションに取り組む Living in Peace を通して1人でも多くのこどもたちに支援を届けたいという想いから、寄付や自社製品寄贈などの取り組みを開始しました。今後もインクルーシブな社会の実現に向けて継続的にサポートを行っていきたいと思います。

インヴァスト証券株式会社

Living in Peace は、こどもたちの生活環境に対する支援や将来に向けたキャリア支援など、こどもたちのための幅広い支援活動を行われていることにまず共感をいたしました。さらに、メンバーの皆さま方が、我々と同じように仕事を持ちながら団体の活動を行っているという在り方に心を動かされたことから、当社の社会貢献ポイントプログラムに実施当初よりご参加いただいております。
こどもたちの未来をつくるため、御団体の活動がさらに広まっていくことを願っています。

ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ

ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、企業理念である「我が信条（Our Credo）」の第三の責任「地域社会に対する責任」を果たすため、Japan Community Impact という組織を有志社員で結成し、社会貢献活動を推進しています。この度 Living in Peace さんの「機会の平等を通じた貧困削減」を目指した活動に共感した社員を通じて、寄付をさせていただきました。貴団体の活動によって、誰もが健康で幸せな生活を送ることのできる社会が実現することを願っております。

メットライフ生命保険株式会社

メットライフ生命のコンサルタント社員および代理店の新規契約数に連動した寄付プログラム「ワンダラー・ドネーション」を通じて、支援をさせていただいています。当社からの寄付は、Living in Peace による児童養護施設のこどもたちへの奨学金やこども食堂の運営にご活用いただいており、支援を必要とされているこどもや若者たち、ひいては、豊かな地域社会の創造のためにお役に立てることを、社員一同誇りに思います。ともにより確かな未来を築いていくパートナーとして、引き続きよろしくお願いいたします。

このほか、以下の企業の皆様からもご支援をいただいています。

- ユーロモニターインターナショナル
- KDDI株式会社
- MFSインベストメント・マネジメント株式会社

（アルファベット順）

寄付のご案内

マンスリー・サポーター

マンスリー・サポーターは、毎月定額で継続的にご寄付いただくプログラムです。団体全体もしくは各プロジェクトに対し、月々 1,000 円からクレジットカードによる継続寄付をしていただけます。ご支援いただいた皆様には、メールでの活動報告のほか、イベント情報などを優先的にご案内いたします。

登録はこちらから
https://www.living-in-peace.org/donate/

スポット寄付

月々の継続寄付のほか、ご都合のよいときに銀行振込で寄付いただくことも可能です。 金額もご自身で設定していただけます。ご支援いただける方は、下記宛にお振り込みください。

振込先
楽天銀行第一営業支店（251）
口座番号　普通口座　7282130
口座名義　特定非営利活動法人 Living in Peace 共通口座
カナ表記　トクヒ）リビング イン ピース キョウツウコウザ

※ Living in Peace は認定 NPO 法人です。皆様の寄付金は税制上の優遇措置の対象となり、寄付金控除の適用を受けられます。
※ 寄付額の一部は、団体維持運営費に充当させていただきます。

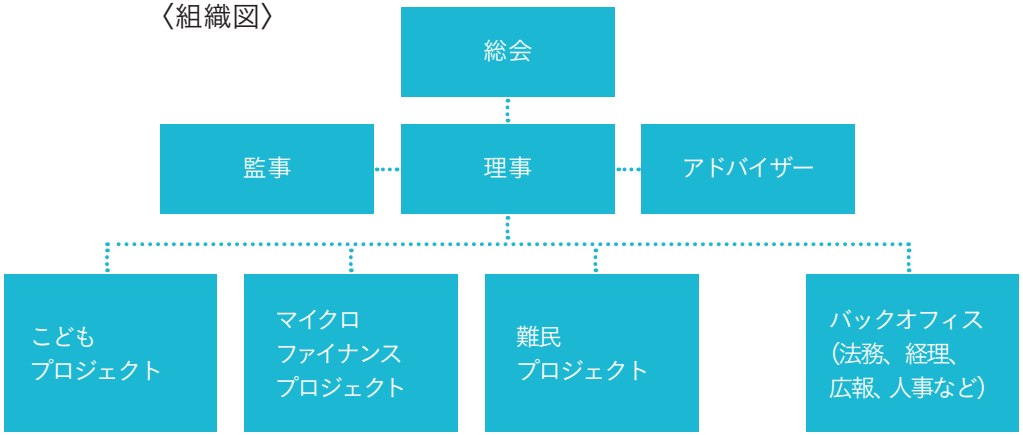
Living in Peace の Code of Conduct（行動基準）

感謝の気持ちを持つこと	私たちは常に感謝の気持ちを忘れることなく他者と接し、行動します。
他者に共感する気持ちを持つこと	私たちは他者の置かれた状況や環境に関心を持ち、思いを馳せ、自分のことのように感じ行動します。
プロアクティブであること	私たちは活動に積極的に参加し、問題に対してはよく考えると同時に、実際に行動を起こします。
多様性を尊重すること	私たちは組織発展の不可欠な要素として多様性が必要であることを深く認識し、多様な属性を持つ人の参加や多様な貢献の仕方を受け入れ、推進します。
謙虚であること	私たちは相手を思いやり、敬う気持ちを持って他者と接します。 私たちは常に内省に努めることで、自分を客観視します。 私たちは好奇心を持って自らに不足する知識や経験の吸収に努めます。 私たちは自分の行動に誤りがあり、またはそれを指摘された場合には素直にそれを認め、速やかに訂正します。
大志を持つこと	私たちは高い志を持ち、その実現に向けて地道な努力も厭わずに取り組みます。 私たちは初心を忘れることなく、原理原則にぶれることのない行動を取ります。
オープンであること	私たちはオープンな場で議論を行い、本人の前で行わない異議申し立ては禁止します。 私たちは全ての意思決定は公開の場で行うことにより、ポリティクスを排除し、偏った意見形成を行わないこととします。 私たちは意見の表出は建設的な提案として行い、反対意見がある場合は代替案を提示します。
前向きであること	私たちはできないことについて後ろ向きの言動を行わず、できることで最善のことを考え、実行します。 私たちは明るく・元気よく・楽しく、をモットーに行動します。
仕事に責任を持つこと	私たちはLiving in Peaceにおける自身の役割・仕事について責任感を持ち、最後までやり遂げます。
本業／学業を大切にすること	私たちは、本業／学業に重く価値を置き、そこにおいて秀でることができるよう最大限の努力をします。 私たちは、Living in Peaceの活動によって本業/学業を犠牲にしません。

これらの行動基準を実践し、継続して活動できる、熱意を持ったメンバーを求めています。
まずはオンラインでの定例ミーティング見学にお越しください。詳細はこちらから。

団体概要

名称：認定特定非営利活動法人 Living in Peace
2007年10月28日 結成
2009年4月13日NPO法人格を取得
2012年7月16日 認定NPO法人を取得

団体所在地：〒103-0026　東京都中央区日本橋兜町 5–1
創設者：慎泰俊
代表理事：中里晋三、龔軼群
理事：木下祐馬、宮本麻由、小林裕二
監事：五十嵐裕美子（五十嵐綜合法律事務所弁護士）、
鈴木瞳（元 マカイラ株式会社 執行役員）
アドバイザー：
小森哲郎（株式会社ファイントゥデイ 代表取締役社長兼 CEO）、
河口真理子（立教大学 21 世紀社会デザイン研究科 特任教授）
メンバー：162 名（2022 年 12 月現在）

〈組織図〉